

「江戸期の多様さが生んだ活力」

増山雄三

当然のことながら、太平洋戦争後の日本社会は、敗戦によって成立したが、それより以前の明治国家は、僅か六十年に満たずに、病み滅んでしまったが、昭和に入ってから、統帥権という国家支配の鬼胎を生じ、国家そのものを滅ぼしてしまった。

それでも、その鬼胎の時代から戦後社会に入った時、焼け跡と食糧難の時代とはいえ、こんなよい社会が来るとは思はなかったが、それはむしろ、日本人の気質や習慣等に合った、自由な社会だったのではなかろうか。

それでも、いまの社会は、行政管理の精度は高いが、平均的な統一性や、人々の持つ価値意識の単純化などがあり、価値の多様化こそ、独創性のある思考や社会の活性化を生むと思うのに、逆の均一へと向かっているので、

やがて日本は衰弱するのではないか。

そんな不安から、江戸時代の商品経済の盛
行が、商人や都市に住む農民たちの間で、合
理主義思想を生んだと思うが、それら社会の
実務層から出てきたのが、荒井白石（一六五
七―一七二五）や荻生徂徠（一六六六―一七
二八）などの、人文科学的な思想家がでた。
それでも、むろん文化の均一性がない訳で
はないが、礼儀作法や服飾に結髪は一種類し
がなく、文章表現の面でもそうであり、公用
とか私用を問わず、藩によって差異がある訳
でなく、また、武家の必須の遊芸として謡曲
を身に付けたのは、蝦夷地の松前藩から九州
南端の薩摩藩に至るまで、変りはなかった。
これが藩法となると、多少藩によって違う
が、それは小異であって大方は同じであり、
また、幕府の性格では、中央政府に似た機能
を果していたとはいえ、徳川家は大名同盟の
盟主に過ぎず、幕府機構は自領の行政をする
だけにすぎなかった。

そして、幕府の司法権は各藩の藩内には及ばなかった。たとえば諸大名は、公館として江戸に上屋敷を持っていて、その屋敷地に罪人が逃げ込んだ場合でも、幕府の司法権は及ばず、また各藩での家中の不始末についても、幕府は、じかに司法権を執行する訳にいかなかった。ところどころで、教育や学問について言えば、そのありかたは藩によって違い、各藩は江戸中期ごろから競って藩校をもち、その充実を図ったが、將軍の家である徳川家の場合、それに相当する旗本学校を、幕府が瓦解するまで持たずじまいだった。

それで、昌平黌や講武所、あるいは洋学機関は、いささか性質が違い、要するに江戸の旗本や御家人の子弟は、勝海舟の父である小吉がそうだったように、ぶらぶらと無学のまま、生涯を送る事もできたのである。

そして、江戸の旗本や御家人の直参たちも呑気なもので、先の小吉の自伝だった「無酔

「独言」では、おれほどの馬鹿な者は、世の中にあんまりいないと思うが、孫やひ孫のために咄して聞かせるが、能く能く不法者や、馬鹿者の戒めにするがいいぜ、と語っている。

一方、佐賀藩では、江戸末期に、人間の漬物でも作るように、家中の青少年を藩校という大桶に入れて、勉強漬けにしてみました。だが、こんにちと同様、六、七才で小学校に入れた、二十五、六才でようやく卒業させた。言うまでもなく、サムライの身分は家禄にあるが、それは、江戸初期の物価レベルで決めたので、江戸後期になると、とてもそれでは食えないので、どの藩でも役に就く事を望み、役料を貰って暮らしを立てていた。

それでも惨いことに佐賀藩は、不出来のため次の段階に進めない者は、役人になれないばかりか、家禄の十分の八を削ったが、その学問とは、暗誦を重んじ独創を否定したので、旧佐賀藩士の大隈重信は、「一藩の人物を悉く同一の模型に入れ、ために倜儻不羈の気象

を亡失せしめたり」といった。

さらに大隈は、「佐賀藩の学制は、豈に余
多の俊秀を駆りて凡庸たらしめし結果なして
せんや」と激しく言っているが、のち、彼が
早稲田大学を興したのは、多分に、このよう
な佐賀の学制への憎悪がそうさせたのだ。

かたや、これに対して、同じ九州でも薩摩
藩は別国で、むしろ意識的に学問を軽んじ、
暗黙のうちながら、藩士の教育など初等程度
でよいとされて、あまり学問をすると理屈っ
ぽくなり、峻烈果敢な士風が、鈍磨してしま
う、と思われていたようだ。

この藩は、他藩にない青少年教育の、郷中
という制度を持っていて、それは、台湾の少
数民族や西日本一帯を覆っていた、南方古俗
の若衆宿を、士族教育の場に吸い上げて、そ
れを制度化していたのである。

芸州藩出身だった頼山陽が、それを「健児
ノ社」とよんで珍しがったのはそれで、居住
区ごとに郷中があったとされるが、他の農漁

村での若衆頭にあたる立場が、薩摩の士族制では、それを郷中頭と叫ぶ。西日本民俗における若衆組が、ムラの長と同格であるように、薩摩の郷中頭も、彼が預かっている少年の父親が、いかに身分が高かろうとも、教育のことで話し合う場合は、全く同格とされたのである。郷中頭は、十八、九才になると引退し、そしてオトナ社会に入るが、若いころの西郷隆盛は、魅力的な郷中頭だったので、彼は乞われるままに二十四才まで、甲突川東岸にあつた、下加治屋町七十余戸の、士族居住区の郷中頭をつとめたが、その頃の若者に、大久保利通や大山巖、それに最年少の者として、東郷平八郎がいたのである。ついでにいうと、明治七年、西郷が下野してからできた私学校というのは、学校というものではなく、郷中の別称だったのであり、この本校は城下に設けられたが、郷士の居住区である外城にも、町内である方隈ごとに、

これが設けられていたという。

下野した後の西郷の位置は、その総郷中頭
とすべきものだったが、若衆宿がときに才
トナ系列と対立するようになり、私学校というの
は、中央政府ともいうべき、オトナ社会に対
峙していたのだが、いずれにせよ、こういつ
た制度は、ほかのどの藩にもない、いわば、
この藩独特のものなのであろう。

また江戸期は、大藩よりも小藩のほうが、
かなり精度の高い学問を行なったが、江戸末
期の蘭学を担ったのは、多くは越前大野、石
州津和野、肥前大村、伊予宇和島といったよ
うな小藩であり、またその出身者達だった。

このように、士族の教育制度という点から
見ても、江戸期は微妙ながらも多様であり、
その多様さが、いささか抽象的な言い方にな
ると思うが、明治の統一期にあった、内部的
な豊富さと活力を、大いに生んでいたとい
えるのではなからうか。

令和三年十二月